

埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2

仁科弘之教授退職記念論文集

言語をめぐるx章—言語を考える、言語を教える、言語で考える—

## 言語は自然物か人工物か

余地 寛

埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科

# 言語は自然物か人工物か

余地 寛

## 【キーワード】

主体、言語システム、言語対象、自然物、人工物

## 【要旨】

言語についての一般的な見解はさまざまであり、実在としての言語、概念システムとしての言語、認識枠組としての言語という3つに分けた場合、言語が自然物か人工物かということは、立場によって異なる。いずれの立場も学問的根拠があるが、ここでは、議論をさらに進めてみる必要があるということで、認識枠組としての言語という立場を展開してみる。この立場は、言語を使用する主体を明示化し、人工物としての言語システムによって言語対象にアプローチするものであるとみなすことができる。この立場は、言語学では認知言語学に近い立場であり、この場合の認識枠組はカテゴリーやプロトタイプと同様のものである。レイコフは、言語について、メタファー（隠喩）の役割を重要視し、身体を介した心の機能と認知的無意識とのはたらきに着目しているが、主体の存在基盤から言語使用が立ち上がる様子をとらえるようにすれば、言語現象の豊かさが取り出されるであろう。

## 1. はじめに

言語学は、生成文法や認知言語学など、いろいろな立場があり、立場ごとに体系化が進んでいる。このことによって、言語とは何か、という問いへの答え方も立場ごとに異なっている。

言語は、思考、認知、行為、コミュニケーション、表現などに深く関わっており、人間が生きていく上で、なくてはならないものである。よって、言語というものは、真剣さをもって解明されていくべきはずのものである。

ここでは、言語というものを言語使用者自らのものとして考え直すということを行ってみる。それにあたり、精緻化された言語学から、いったん離れて、言語とは何かを巡る諸立場を整理することを通じて、言語について見落とされている見解をあぶり出していきたい。

## 2. 言語とは何かについての諸見解

言語は、ソシユールの見解によって、本来は、音声による聴覚映像を基にしたものであり、言語を用いる人々の間に意思疎通がもたらされる限りにおいて、音声や語彙や文法についての様々な言語規則をもっている。このようなことにより、言語は一つのシステムであるといえる。言語による思考においても同様である。ここまでは、どのような立場をとるにせよ、おそらく共通する見解であると思われる。ここから先は、立場によって、見解が大きく分かれてくるが、ここでは、おおざっぱに3つに整理してみたい。

### 2-1 実在としての言語

言語は、音声や語彙や文法についての様々な言語規則をもった、一つのまとまりであって、その使用者はその言語規則に従って言語を使用する。言語使用によって現出する言語現象は、その言語を共有するコミュニティにとって、リアリティをもったものであり、現出する言語現象を含めて、言語は実在するものである。これが、おそらくは伝統的な言語学が採る立場であろう。しかしながら、リアリティに基づいて研究するという事は、各研究者が共通の見解をもつということは何ら保証するものではない。素朴実在論と同様に、「感覚的に分かるだろう」というのでは科学的ではない。言語ということ、各人が経験に基づいて見解を提出しているだけに、議論は錯綜することになる。この立場では、とりあえずは、言語は各々の使用者から独立した自然物であるともみなされるであろう。

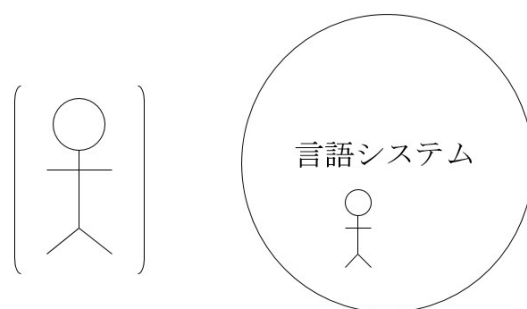


図1 実在としての言語

図1で、人をカッコ入れにしているのは、言語使用者などの人を考慮に入れなくても、言語は実在するという事を表現したいためである。言語システムの中に人が入れられているのは、その人に言及することがあるということを示している。この場合、指示の問題が出

てくるが、ここでは深入りしないことにしたい。

## 2-2 概念システムとしての言語

生成文法の立場では、プラトニズム（観念論）に依拠して、言語は、自動的に生成するものである。これだけを取り出せば、これは統語論（構文論）である。この見解を採ることによって、言語はア・プリアリなものであることになり、言語獲得の過程において、教える者がいなくても、正しい文法に則って話したり書いたりできる言語現象を説明することが可能になる。しかしながら、生成の結果として、理想的なもののみが出てきても、現実から、かけ離れがちである。実際の言語現象では、不変化詞移動や受動態など、句構造規則に沿わないケースもあり、このような調整は変形規則として行われる。

いろいろな言語があっても、言語の仕組みは同じであるという見解が採られれば、それは、普遍文法というものがある、という立場である。このような普遍文法というのは、人間にのみ備わったものであり、各人が、言語のこのような仕組みを勝手に変えることはできないというのであれば、この立場では、言語は自然物である。一方で、この立場での言語システムは、機械で実現することも可能であり、その意味では、言語を人工物として位置づけることもできる。

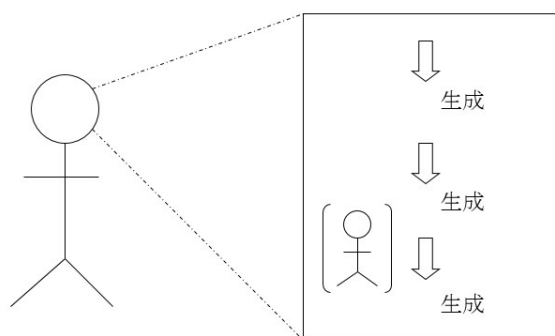


図2 概念システムとしての言語

この立場では、意味のレベルは、統語論のレベルの上に位置づけられる。生成されたものが意味をなすかどうかは、意味の空間の中で解釈されなければならない。また、意味の方から出発する心的実在の在り方が採られれば、それは観念論になる。観念論は理想主義と結びつきがちであり、養老 1995 が言う、脳（ここでの場合は、心的実在がはたらく場）が社会の方に外化された「脳化社会」は、心が外的に身体化しうることを言い当てている。ただ、このような場合には、個々の

人間が介在しなくても、天下りの的に、理想の実現という方向に力がはたらく。

チョムスキーの標準理論では、統語論のレベルは表層構造を扱い、意味は深層構造として扱われていると位置づけることができよう。深層構造での一義的な意味にたいして、表層構造はさまざまな形をとることが可能であるが、これは、深層構造があつてこそそのバリエーションであつて、表層構造が独自に自由であるということではない。表層構造と深層構造については、この後の方で、さらに考察したい。

### 2-3 認識枠組としての言語

言語を使って、何らかの言語対象を把握する、という考え方も可能であろう。このような立場では、人間が、言語という網のようなものを使って、その言語の対象をたぐり寄せる、ということが行われる。言語が網のようなシステムであるということであれば、言語は道具であり、人工物であることになる（余地 1995、余地 2000a）。そうすると、何のために道具を用いるのかといえ、それは、言語そのものが大事であるというのではなく、言語の対象の方をなんとか手中に収めたいからであり、言語よりも対象の方に重点がある（余地 1996）。もちろん、道具としての言語も、その使い勝手がよい方がよく、絶え間なく磨きをかけておきたいものである。

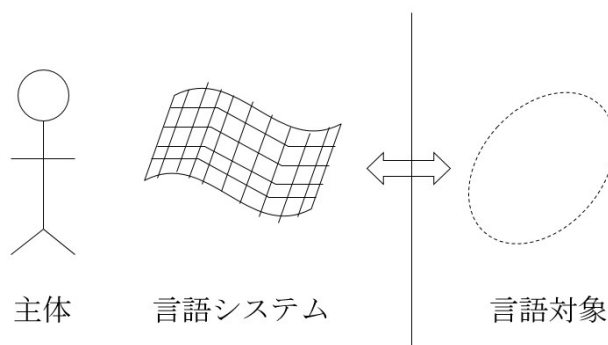


図3 認識枠組としての言語

このような、言語の対象の把握の方を求める立場は、存在論 (ontology) である。この場合、言語の対象を確実に把握している必要はない。言語の対象を把握しようとするプロセス自体が大事である。むしろ、言語の対象を確実に把握していると思ひ込むことは、形而上学への入り口であり、決して、言語の対象の存在そのものを尊重することにはならない。対象を一面的にしか把握しておらず、決めつける

ことになっているかもしれない。言語の対象を的確に把握するというのであれば、図 4 のように、言語システムの方を変え、言語の対象に合わせていくことになる。一つの対象にたいして、いろいろな言語表現が可能であり、場合によっては、比喩で表現されることもある。そして、言語システムと言語対象とが、それなりに一致したとき、その言語システムにリアリティがもたらされる（余地 1996）。存在論と実在論（realism）は、用語が似ていることもあり、また、存在物を巡る考察であることから、混同されることが多いが、存在論と実在論は区別されなければならない。中山 2009 は、この点について、明確な区別をしている数少ない文献である。

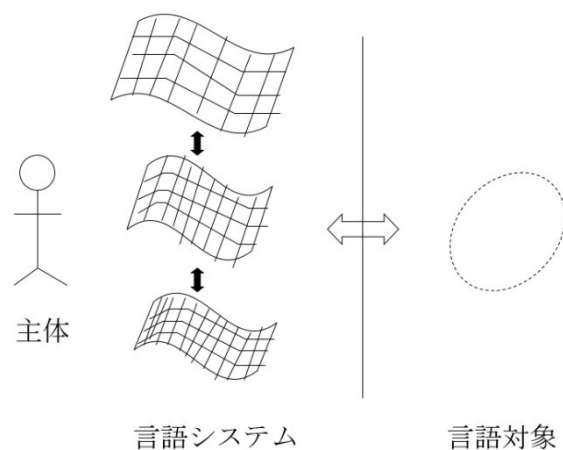


図 4 言語システムと言語対象の対応

言語システムと言語対象とは、地図と現地との関係に類似している。地図というのは、現地を詳細に表していることを必ずしも要求されない。詳細過ぎれば、かえって、目的地を見失うこともあるであろう。これは、かつて一般意味論（いわゆる意味論とは別のものである。コージブスキーが代表的な研究者である）が提出した見解である。

言語システムにいろいろなレベルがある、という見解には、にわかには賛同しえないということがあるかもしれない。しかしながら、「言語の対象に即して」、言語システムがいろいろでありうる、ということも少しでも認めるようであれば、これは実在論ではなく、唯名論（nominalism）である。唯名論についても、中山 2009 がよい理解を与える。唯名論に立脚するということは、言語が人工物であるということを支える考え方である。言語を始めとして、貨幣、社会制度、法律も人工物とみなすことができるはずであるが、往々にして、これらは変えることができないものとみなされている。今在るものとは違っ

たものとして在りうる、という人工物のとらえ方をすることは、よりよい生活をもたらすことにつながるであろう。

この、認識枠組としての言語の立場では、言語システムを用いる主体が明示的に設定されている。ソシュールやエミール・バンヴェニストでも「語る主体（聴く主体）」（立川・山田 1990）ということが言われ、記号学者 C.S.パースも主体を軸にしているが、言語システムを用いる主体を明示的に取り出すことが新しい見解をもたらさう。

客観的な言語システムというものにしようとしても、客観的なものにできない、主体的な要素が必ず入り込んでくる、というイェルムスレウの見解がある。ソシュールは、ラング（言語システム）と主体とを切り離していたが、イェルムスレウは「ラングのなかの主体」というものを問題にした。しかし、この作業を通して、ラングのなかに主体の痕跡を見出したのである。このようなことから、イェルムスレウはソシュールの後継者と位置づけることができる（立川 1995）。どうしても主体が入り込むことは、英語などで、たとえば、主体の目線で前置詞を用いる際に、相対的な位置関係ができてしまう、といったところに現れてくる。言語習慣でも、“I’m coming.（いま行きます）”などといった表現は、主体とその相手との関係の上に行われており、このような関係を見無視しては、コミュニケーションは成り立たない。

こうして、主体を明示的にするというのであれば、認識枠組としての言語という立場は、認知言語学、言語行為論、語用論（pragmatics）を展開するのに都合がよいということでもある。

「認識枠組」という用語は、一般システム理論で用いられてきたものであり、ここでは、道具であり、人工物である、という意味合いをもたせて用いている。「認識」というのは、「認識論（epistemology）」のような、哲学的にハードなものではなく、工学などで「認知と行動」といったように用いられる「認知」という用語に置き換えてもよい。

「認識論」としてしまうと、それは「観念論」と同義である。「枠組」は、ここでは、ビジネス思考などで用いられるようになってきたフレームワークと同じようなものと考えてもよいであろう。哲学の方では、アリストテレスのカテゴリー論（範疇論）のようなものである（余地 1996）。ただし、この場合のカテゴリー論は、ネオプラトニズムによって認識論の方に読み替えられたものではなく（いわゆる範疇論隠し）（余地 2000b）、アリストテレス本来のものに近いものである。この認識枠組は、認知言語学の方では、プロトタイプと言われるものと同じようなものである。「家族的類似性」という、周縁性をも含むものを考慮に入れることもできる。しかし、認知言語学でも、カテゴリー論で

も、議論の展開を始めるに当たっては、言語システム全体ではなく、単語や言葉のレベルから出発することが多いため、言語の他の要素が考慮されていないように見受けられる。このようなこともあって、言語システム全体を議論に引き入れたいということから、認識枠組という用語を使わせていただきたい。

主体が、網のような認識枠組を用いて、言語対象を引き寄せるわけであるが、日常の言語使用に当たっては、道具としての認識枠組は必ずしも意識されない。むしろ、いちいち言語システムのことを意識しないで、会話というコミュニケーションの方を楽しむ、といったことも行われているであろう。それにもかかわらず、言語は、いたるところに介在し、使用されている。この辺の議論は、言語が先か、思考が先か、ということにつながっていくので、ここでは深入りしないことにしたい。認識枠組とその対象は、仏教の「空」の態様を想起させる。

このような言語使用にあっては、主体、言語システム、言語対象のほかに、文脈 (context) と、言語が使用される環境とがあるということに注意したい。言語行為論のように、主体を取り出すからといって、主体にのみ目を向けるわけにはいかない。そして、主体を取り出すことによって、もう一つ、注目しておかなければならないのは、言語使用によって、主体以外のものが、主体に合わせて身体化されている可能性がある、ということである。言い換えれば、言語を使用するに当たって、主体は、主体の周囲にあるものを、何らかの形で構造化している可能性がある、ということである。この辺の議論は、認知人類学や認知工学につながっていく (余地 2000a)。

以上、言語の 3 つの立場について、おおざっぱに見てきた。筆者としては、この 3 つの立場のどれがよい、ということを手を主張するつもりはない。どの立場も、人類の伝統を支えてきたものであり、それぞれ、学問的根拠があるからである。

ただ、ここでは、認識枠組としての言語、という立場について、さらに議論を進めてみる必要があるということから、この 3 つ目の立場に重点を置いて、考察を展開していきたい。

### 3. 存在の階層

概念システムとしての言語と認識枠組としての言語との違いは、存在の階層の立て方の違いに現れる。それは、認識枠組としての言語という立場が存在論に立脚しているからである。



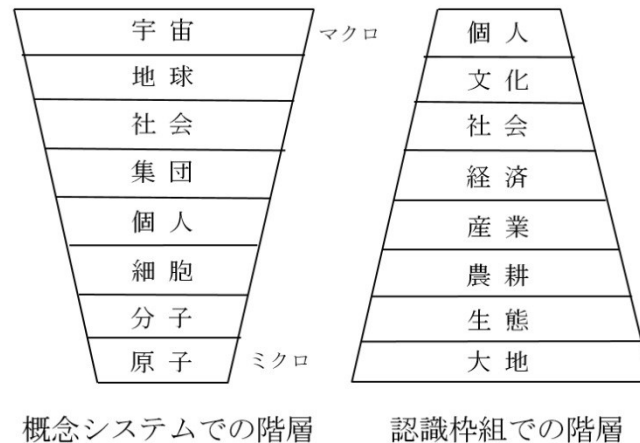


図5 存在の階層の立て方の違い

図5の「認識枠組での階層」はメサロヴィッチの考え方を参考にして作成したものである（Mesarović & Pestel 1974、余地 1994）。また、「概念システムでの階層」については、ここでは、「ミクロとマクロ」という観点から、階層づけている。物理的な存在のみに着目すれば、その階層は整然としており、素粒子の世界と宇宙は統一的である。存在の階層レベル同士は、アナロジーによっても認識可能である。とはいえ、人間や社会に関する存在は、複雑な要素があるため、アナロジーを適用することは忌避されがちである。

認識枠組での階層については、主体としての個人が、存在の階層の一番上にあることが特徴的である。個人が一番上にあることは奇異に思われるかもしれないが、この立場では、主体が、システムを使って、その対象を把握する、ということになることを思い起こしてみれば、納得がいくかもしれない。主体としての個人は、その下の方の階層によって実質的に支えられており、下の方の階層から立ち上がるものでもある。各個人は母なる大地（デー・メーテール）から立ち上がり、再び土に還るものである。このような階層の立て方は、マルクス主義や唯物論では、よく採られるものであるが、ここでは、それらの思想とは、とりあえず切り離して考えることにしたい。階層のこのような立て方は、下部構造が上部構造を支える、というものであり、文化や価値は上部構造にあって形成されるものである。

#### 4. 認識枠組とメタファー

認知言語学が、ここでの「認識枠組としての言語」という立場に位置づけられるとすると、この立場から示唆されるものと、認知言語学の現状とには、差異がある。認知言語学といっても、ラネカーの見解

とレイコフの見解とは同じものではないし、認知言語学を打ち立てた研究者は他にも数人いて、やはり見解が異なる。認知言語学は、もちろん、科学としての言語学を志向しており、慎重に研究が進められていて、ラネカーによる研究は、特に、その傾向が強い。認知言語学の特徴はメトニミー（換喩）の扱いに現れ、参照点とターゲット、焦点の移動とフレームといった理論が駆使される。それに比べて、レイコフの研究は少し粗いという評価がなされることが多い。しかしながら、レイコフの研究の重点はメタファー（隠喩）の役割というところにある。レイコフは精力的に研究を進めており、大胆な見解を提出していることに着目すべきであって、その見解は、ここでの「認識枠組としての言語」という立場になじむものである。

レイコフ（レイコフ&ヌーニェス 2012：5-6）によれば、次の3つが重要であり、新しい見解である。

- ①心の身体性：人間の身体や脳が、人間の抱く概念と人間の推論とに構造を与えている。これは、心が身体化するというのではなくて、心が、身体を介して機能するということを表している。
- ②認知的無意識：ほとんどの思考は無意識的である。人間は思考プロセスを直接に見ることはできない。
- ③メタファー的思考：多くの場合、人間は抽象概念を具体的な事物によって概念化する。抽象的なものが具体的なものによって理解されるメカニズムを概念メタファーと呼ぶ。

レイコフのメタファー的思考では、抽象概念を具体的な事物によって概念化するが、これは、ある種のアナロジーとってよいであろう。これは、2つの事物があったときに、一方が分かっていたら、それを手掛かりにして、他方を理解する、ということである。そうすると、概念システムの立場と同じようなものになると思われるが、身体を介しているところが違う。また、「概念メタファー」という用語を導入しているが、これは、概念システムにおける概念のような重い意味をもたされてはいない。

## 5. 無意識の構造の導入

レイコフが持ち出している「認知的無意識」にこだわって、ここで、カール・グスタフ・ユングの「無意識の構造」という考え方を導入してみたい。

図6は河合1977を改変したもので、それを参照すると、認識枠組での存在階層の立て方と符合し、これによれば、主体による言語使用と

いうことも、よく説明できるように思われる。

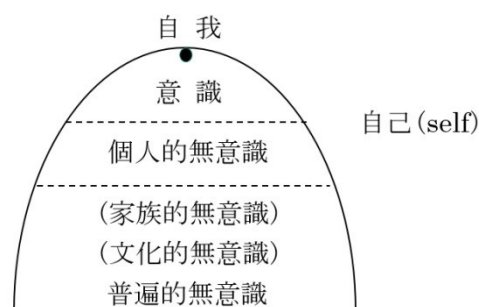


図 6 無意識の構造

「無意識」ということでは、フロイトの考え方がよく知られているが、フロイトでは、個人的経験の中で抑圧されたものからなる無意識の世界を考える。レイコフ自身、ここでの無意識はフロイト学派のものではないことを明言している（レイコフ&ヌーニェス 2012：6）。一方、ユングはフロイトの教えと訣別し、無意識には層があり、個人的経験に基づく個人的無意識のさらに奥深くに、個人的経験に基づかない、人類が普遍的にもつ普遍的無意識の層が存在する、とした（小野・佐藤 2016：162）。意識も無意識も含む自分全体の中心としての自己は、意識が一面的であった場合などに、無意識の層から、それを補って、全体性へと向かわせるものであり、そこに創造的可能性のはたらきがあるとされる。レイコフは無意識をこのように考えているとは限らないが、無意識のこの層は、仏教の唯識では、阿頼耶識に相当する。ユングの考え方を導入するのはスワリがよいと言える。

ユングは、スキャンダラスなこともあって、忌避する向きもあるが、ここでは、学術的な成果ということで参照したい。ユングは言語連想検査から出発しているが、無意識のこのような層を明示化することによって、いろいろな事項を説明することが可能になる。集団的無意識ということで、空飛ぶ円盤や心霊現象などといった不可思議なことも説明がつくようになる。ユング自身、心理的危機を経験し、個性化過程を達成したのであるが、円・四角形・三角形からなる絵を描くと心が落ち着いたという。その絵は奇しくもマンダラ（曼荼羅）と共通点があることが、後になって判った。多くの症例で、心理的危機を脱する際に、曼荼羅図が描かれることが認められているようであるが、これは普遍的無意識である。これは、神話・昔話、都市伝説、ミーム（meme）といった文化遺伝子、既視感（デジャ・ヴュ）といったこととも関連づけることができるかもしれない。これらは元型（archetype）

となるものである。ユングは、さらに立体曼荼羅ともいえる塔をボーリングゲンに自分で建てて生活の拠点とした。もっとも、ユングは、グノーシス主義、そしてデミウルゴス（造物主）といったものに影響を受けていて（これは本来、概念システムの立場のものであるが）、その上で絵を描いており、ヘルメス主義や錬金術に圧倒的な関心をもっていた、ということ念頭に置くべきであろう。

「意識」は「分ける」ことによって成立するとされ、光と闇、天と地といったように、分けることが意識の確立になる。そして、「自」と「他」も、分けることによって「自我」が生じてくる。「自」と「他」を分けて、「他」を対象化することによって知識が得られるが、意識によって「自」そのものを対象化することには困難を伴う。ここに、単なる知識ではない、個人の体験が重要となってくる。このような「自」と「他」の境界にいる人のことは境界例と言われる。この場合の境界（liminality）は、人類学者ターナーの用語でもあり、トリックスターや両性具有に言及する際にも用いられる。ヤブユム（歓喜仏、歓喜天）という象徴は、女性原理としての般若の智慧と男性原理としての方便の活動が本来は一つであり、境界的であるということを表して、これも、普遍的無意識でとらえられうる。

## 6. おわりに

認知言語学の研究の多くは、表層的な言語現象を扱っているように見え、これは上部構造のみを見せるものである。このことが、科学としての言語学を保証するのかもしれないが、これでは、言語現象の豊かさを示すことができず、もしかしたら、言語学の成果を期待している人々を裏切っていることになっているのかもしれない。言語使用の下部構造を何らかの形で見るとすれば、言語使用が存在基盤から立ち現れるということを示すことができる可能性がでてくる。存在基盤は、「存在」として、すべてが分かっている必要はない。いろいろな立場で、言語進化ということが言われているが、これは、上でみてきたことを踏まえてこそ、実質的な議論となるであろう。

下部構造から自己が立ち上がるということは、自己が置かれている環境からの影響があるということであり、このこと自体が、自己の個性を裏付ける。個性は、存在基盤の普遍性があるからこそ保証されると言える。個性としては、いろいろなものがあるはずであり、各個性は、標準的な言語使用を意図しても、どうしても言語使用の「ズレ」を生じさせてしまうであろう。これも言語ゲームと言える。

下部構造は、人が人であることを限定するものである。これはコミ

コミュニケーションの基盤を与えるものであり、これがなければ、言語によって会話が成り立つということもない。こうして、言語は人工物であるという見解から、再び、自然物でもあるという見解にたどりつく。

## 参考文献

- 小野けい子・佐藤仁美（編著）（2016）『改訂版 心理臨床とイメージ』NHK出版
- 河合隼雄（1977）『無意識の構造』中央公論新社
- 立川健二（1995）「世界は言葉のなかに存在する一言葉とその主体―」『脳・心・言葉』栗本慎一郎・養老孟司・澤口俊之「自由大学」講義録，pp.161-222. 光文社
- 立川健二・山田広昭（1990）『現代言語論』新曜社
- 中山康雄（2009）『現代唯名論の構築』春秋社
- 西村義樹・野矢茂樹（2013）『言語学の教室―哲学者と学ぶ認知言語学―』中央公論新社
- 養老孟司（1995）「「脳化社会」へ至った人間」『脳・心・言葉』栗本慎一郎・養老孟司・澤口俊之「自由大学」講義録，pp.97-160. 光文社
- 余地寛（1994）「人間中心システムの概念的基礎づけ」『科学基礎論研究』第八十二号，21-4，pp.37-43.
- 余地寛（1995）「認識枠組としてのシステムを介した情報・通信」『平成4年度情報通信学会年報』pp.17-34.
- 余地寛（1996）「システムサイバネティクスとその存在論的立場」『科学哲学』29，pp.77-94.
- 余地寛（2000a）‘Philosophical Implications of Theory of Affordances,’ *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, 9-5, pp.13-25.
- 余地寛（2000b）「情報技術における言語知識の在り方」『科学基礎論研究』第九十四号，27-2，pp.47-52.
- レイコフ，G.・ヌーニェス，R.（植野義明・重光由加（訳））（2012）『数学の認知科学』丸善出版（Lakoff, George & Núñez, Rafael E. (2000). *Where Mathematics Comes From: How The Embodied Mind Brings Mathematics Into Being*. New York, NY: Basic Books)
- Mesarović, M.D. & Pestel, E.C. (1974) ‘World Crisis and the Role of Cybernetics in Search of Solutions,’ in Rose, J. (ed.) *Advances in Cybernetics and Systems. Vol.1*. Gordon and Breach, pp.51-65.

（埼玉大学教育機構非常勤講師）